

令和4年度 教職員による自己評価・中間評価のまとめ（令和4年7月末）

湯梨浜町立湯梨浜中学校

各評価項目の取組状況

（A：充分達成できている… 4

B：ほぼ達成できている… 3

C：取り組んでいるが成果が十分でない… 2

D：取組が不十分… 1）

※平均値について A相当 4.0～3.25、B相当～2.5、C相当～1.75、D相当～1

1 教職員による自己評価・中間評価

（1）学習に自ら主体的に取り組む生徒の育成に努める

平均値	主な評価理由や参考となるエピソード（抜粋）
[B] 【2.7】 (R3 2.9) (R2 2.8) (R1 2.5) A 7% B 57% C 36% D 0%	○一人一回の研究授業など、授業研究会をしっかりと計画的に行い、協同学習の理解が進んでいる。 ○学校全体で協同学習の取り組みを行い、徐々に成果も上がってきていると思われる。各教員が授業づくりに励み、校内授業研が実践者以外にも学びのある場となっている。 ○校内授業研などの活動を通して、「主体的」とは何か考え実践しようという共通意識がある。 ○日常の授業から、協同学習を基盤とした授業が展開できたと思う。こういった授業を行うことによって、指示をしなくても生徒が主体的に、調べ学習や、自分なりに、授業のまとめを書いたりする生徒が増えてきた。 ○研究授業等で生徒が主体的に学ぶ姿をみることができる。積極的にグループ活動をしたり、質問をしたりしている。 ○授業での学習活動への生徒の参加率が高い。互いに意見を聞き合って、自分の考えを広げたり深めたりしようとする姿がある。 ○生徒同士が班内で分からない課題について話し合ったり、教え合える授業展開になっており、伝え合いや関わりが持てている。 ○集団としての活動の際に、生徒同士の関わり合いや、教え合いの姿勢は培われているように感じる ○ペア活動や班活動等で、生徒同士の教え合いや話し合いの場面でしっかりと課題に取り組む姿が多く見られる。分からない生徒も班員や友達に気軽に聞ける雰囲気があり、よい関係が出来ている。 ▲協同学習にも慣れてきて、少しずつ主体的に取り組む姿が見られるようになってきているが、まだ不十分だと思う。低位の子も取りこぼさないように、互いに高め合おうとする態度を育てていかなければならない。 ▲研究授業の内容を見ても、まだ主体的に取り組むという点で成果が上がっていない現状があり、杉江先生のアドバイスを元に各教科でしっかりと取り組んでいかなければならないと感じる。 ▲生徒同士の関わり合いや、教え合いの姿勢は培われているように感じるが、特定の相手に限られていることが多く、新たな関係を構築することに困難さを抱えている生徒が大多数である。また、個人として課題に挑戦する際に課題に向かう意欲が弱い生徒が多くいる印象を受ける。 ▲中々自分から関わっていくことができず、受け身に感じられる生徒や特定の生徒としか関わらない(れない)生徒もいる ▲個々の生徒を見れば段々と意識は高まっていると思うが、全体としてはまだ主体的に取り組んでいる状況にまでは高まっていないと思う。 ▲与えられた課題を解決することで満足してしまい、自分なりの工夫をしたり、深く追究したりする意欲は乏しいと感じる。 ▲学年・学級、教員によっての差があると感じる。

	▲Aにならない理由は学校としてこの項目について検討しておらず、教科によって見とりに偏りがみられると感じるため。 ▲特別支援学級の学習が課題である。個人スペースで学習するよう工夫し、以前に比べ学習する時間が長くなった。 ▲何かしらの理由をつけて授業に参加しない(抜け出す)生徒、明らかに授業を受けたくない様子の生徒に対して教科担任はどのように関わるのがよいか悩む。 ▲授業中、発言する場面で声が小さいことが課題と感じる。
--	---

(2) 体験をととして温かな人間関係づくりを促進し、生徒自ら魅力的な学校づくりに取り組めるよう努める

平均値	主な評価理由や参考となるエピソード (抜粋)
〔B〕 【2.5】 (R3 3.0) (R2 2.8) (R1 2.5) A 3% B 52% C 35% D 10%	○協同学習の理念のもと、自他を高め合う体験を日常的に学習中に行うことによって生徒の人間関係づくりが促進されている面もあると思う。生徒会による「意見箱」活動も開始され、生徒による魅力的な学校づくりが進められているように思う。 ○体験活動や協同学習の実践を通した人間関係づくりについては、総合的な学習の時間の取り組みや委員会活動などを通して培われていると感じる。 ○クラスでの学級活動や委員会活動で、自分の仕事に責任をもって行動させることによって、自覚が芽生え、クラスのために動いてくれる生徒がとても増えた。 ○朝「がんばりたいこと」、夕「自分のがんばり、仲間のがんばり・ありがとう」を伝え合う短学活を行っている。互いに高め合い認め合う場となっている。 ○学級内で他の人の為に率先して動く姿勢が多く見られるようになってきている。授業に集中できていない生徒に対しても生徒同士の声かけや注意し合えるクラスもある。 ○学校全体の取り組みをなぜするのか、どんな想いで行っているかを伝えること、また反対に生徒達の思いを聞き受け止めることを続けた。その結果、授業評価ではAが増えたり、2分前着席ができる日が増加した。 ○生徒会活動では、生徒が企画を考えてよりよい学校にするために、各委員会でも主体的に取り組んでいると思う。給食委員会では、きちんと白衣を着用させたり衛生を徹底させたりする活動について、委員長を中心に取り組んでいる。 ○主に給食当番の活動について、困っている場面や、困るであろうと思われる場面に積極的ににかかわり、問題解決している生徒がいる。 ○行事、給食、美化活動などを通して、集団の一員としての役割を自覚して協力して取り組むことができる生徒が多数いる。 ○昨年度と比べて、朝、廊下ですれ違うときに、挨拶をしてくれる生徒が増えた。 ▲グループワーク等を通して生活面だけでなく、学習面でも他者と関わりながら人間関係を構築しようとする意識はあるように思うが、魅力的な学校作りという意識はあまりないと感じる。 ▲生徒が学校のきまりや自らの学校生活に対して疑問を見つけたり、その解決方法を検討したりする機会がない。 ▲学校の活動の中で、美化や給食などの取り組みを行っていく中で生徒自身が考え、行動していく場面が少ないかなと思う。教員は意義などを話していると思うが、生徒自身はなかなか自分のこととして考えられていないのか。 ▲生徒自らという観点から見ると不十分な場面がある。 ▲学級活動や生徒会活動、学校行事等で、仲間と協力しながら取り組む姿が見られる。反面、他人任せで自主的に行動を起こせない生徒もいる。 ▲暴言や暴力もあり、あまり魅力的な学校とは言えない。

	▲善悪の判断ができない。まわりに引きずられるような言動を多く見る。 ▲人権学習の取り組みができていないため、自分たちの集団を見直し、人権感覚を磨く機会が少ないため、根本的な部分でのつながりができていないと感じるときがある。 ▲生徒の中には決まったことをやっておけばよい、といった意識がまだあると思う。自ら進んでよりよい学校を、という雰囲気には遠い。
--	---

(3) 保護者や専門機関、地域との連携を深め、長期欠席への対応や特別支援教育の推進に努める

平均値	主な評価理由や参考となるエピソード（抜粋）
〔C〕 【2.4】 (R3 2.8) (R2 2.8) (R1 2.5) A 9% B 30% C 52% D 9%	○小学校時代に不登校だった生徒の教室復帰ができた（1年生3名）。 ○生徒指導、不登校対策委員会等で、個別の対応が必要な生徒について確認・情報共有し、次のステップ（支援会議や外部機関との連携）に繋げることができている。また、相談室から、遅刻して登校し生徒玄関から入っていた生徒に対しての声かけにより、来賓玄関から入ることができるようになった生徒もいる。 ○長期休みになりそうな場合は iPad の貸し出しを提案したり生徒の授業プリントをコピーして渡したりと、少しでも家庭で学習できる機会をつくった。また、単なる体調不良以外の欠席では必ず家庭連絡し、先手を打つようにした。 ○不登校の生徒の保護者とは週に一度以上は連絡を取るように心がけている。また、体調不良の生徒には積極的に電話等で連絡するようにしている。 ○SSW、SC、支援センターなどの専門機関との連携をとって支援方法を協議している。 ○必要に応じて SC などのカウンセリング等を進めている。 ○支援会議等、早めに関わりながら、こと細かく対策を立てて取り組んでいる。支援会議の機会を定期的に持ったり、日頃からの家庭連絡など関係構築の意識は教員が共通して持っていると思う。 ○本人や保護者との対話、連携、専門機関への相談など担任・学年主任・特支主任が助言を含めよく動いていると感じる。 ▲現段階では外部機関と連携をしているところのため、これから成果が出てくることを期待している。 ▲生徒によって様々な悩みや不安を抱えており、家庭環境等の様々な背景があり、中には授業に入れない生徒の姿も見られる。 ▲長期欠席や不登校傾向の生徒については、担任、不登校担当の先生はもちろん、特別支援教育担当の先生も含めて、迅速に対応できているように思う。特別支援学級や支援の必要な生徒については、本当に支援を必要としている生徒が充分な支援を受けられるような状況をつくらなければならないと思う。 ▲個々の状況対応した支援により登校が増えた生徒がいるが、個別対応の生徒が多く、手が回らないことも多々ある。 ▲支援学級生徒に対する対応の違いがある。 ▲特別支援教育についても、担任任せ、主任任せになっている事も多く、学校全体として推進に努められているとはいえないと感じる。 ▲担任をはじめ学年で対応しているが、その場しのぎの対応になってしまっている。特別支援教育推進委員会が一度あったが、その会での収穫はほぼなかったように思う。 ▲「努める」ことはしているが、十分に「できている」状況ではないと考える。連絡ノート、電話等で保護者への連絡をして協力を仰ぎながら、療育園の医師、倉養コーディネータ等の助言も参考に指導している。それでも対応しきれない場合、どうしていくかを模索中である。

	▲関係の深化や特別支援教育の推進に努めている先生も多いとは思いますが保護者が協力的ではない場合や、どの専門機関とも繋がれていなかったりする場合に成果が十分ではないと思う。学校ではもうカバーしきれないケースも出てきている。 ▲長期欠席の生徒が大きく増えることはないが、一度不登校になると、学校復帰が困難な生徒が多い。特別支援学級の生徒が授業に参加せず校舎内外を勝手に出歩く行動はよくないと思う。 ▲特別支援学級のクラスによって、授業中に教室を抜け出したり、授業中に寝たり遊んだりして、授業に向かうことが難しい生徒が複数いる。 ▲特別支援学級の中で、授業に出ないで校内をウロウロする生徒の対応が大変。空き時間に生活ノートを見きれないこと、予定していた授業準備が進まないことなどが頻繁にあった。 ▲本来の特別支援教育ができていない部分がある。特別支援＝自分たちの都合で行動できるではないと思う。落ち着いて学習に向かおうとしている生徒の気持ちを阻止するようなことがあってはならないと思う。 ▲授業を受けることができない生徒への対応は、現在の職員体制では困難である。 ▲一部では綿密に連携や話し合いが行われていると思うが、それが全体に広がっていないところがある。ことが起こってから対応が多かったように思う。 ▲長期欠席や教室に入れない生徒についての対応がはっきりしないまま1学期が終わってしまった。できる限り早めに対応を決めて、後手にならないようにしたい。 ▲学年が上がる際の引継ぎが十分でないように感じる。事が起こり、対応をしていく中で、指導が終わるころに「去年はこうだった」という話がでる場面が何度かあった。 ▲通常学級にいる特別支援の必要な不登校傾向の子どもは担任とのやりとりだけであり、具体的な方針や支援会議などの進捗状況は把握できていないように感じる。個別の支援計画等の作成・共有もできておらず、どのような支援が必要なのか、どのような特性があるのか全体として共有できていない。 ▲保護者の方との連携をとるのは担任でなければならないか。何か家庭へ連絡をとることがあったとき、ほとんどの場合担任が連絡をとっているように感じる。それによって連携が遅れてしまうこともあるように感じる。担任がしたほうが良いという場合もあるだろうが、分担すればいいように思う。
--	---

2 今後の取組

(1) 学習に自ら主体的に取り組む生徒の育成に努める

- 協同学習の理念を生かした学校全体での授業研究を推進し、協同学習の定着を図る。
 - ・協同の理念と授業づくりのポイントの理解を中心とした研修を実施する。
 - ・「主体的に取り組む姿」を明らかにし、各教員が自己点検できるようにする。
 - ・他と協力して達成できる課題設定を増やし、関わる必然性をもたせ、集団活動の意義や効果について理解させて、目的意識を持たせて活動させる。
 - ・授業の流れについて示し全体の見通しを持たせて、活動を生徒に委ねるようにする。
 - ・学力差に対応するため、学習を深める課題の提示では個で追究する場面も設定していく。
- 必要な生徒には個別に適切な声かけや参考資料の提示等を工夫する。
- 授業中の効果的な対話のためにも、家庭学習の仕方やノートのとり方などを細かく伝え、知識の定着や理解の深化を図っていく。

(2) 体験をとおして温かな人間関係づくりを促進し、生徒自ら魅力的な学校づくりに取り組めるよう努める

- 生徒同士、生徒と教員の関係構築に有効な活動を精選し必要なコロナ対策を講じた上で可能な限り実施できるよう工夫する。特に行事を核として日々の活動を充実させていく。

- 生徒会執行部の意欲を生かし、生徒会企画などさらに生徒を前面に出した活動を進めていく。
 - その中で、生徒会執行部が生徒の意見を吸い上げる方法を工夫し、一人一人がよりよい学校づくりに参画する意識を高める。
- 人間関係トラブルの未然防止と回復促進のため、二学期以降も時間をつくってGWTに取り組み、日頃からコミュニケーションスキルを高める。
- 教員から生徒に取り組みを求める場合に、その意義や必要性を伝える。また、教員の価値観や考えだけでなく生徒の考えを聞き、教員・生徒の意見をすりあわせながら企画や規則を作っていく。
- Q-Uの分析を生かした学級、学年の取組の推進。全体指導、個別指導。
- 人権教育で、講演会だけの学習ではなく各人権課題に対して何が問題で我々はどう生きるべきなのかを考えさせる活動を取り入れる。

(3) 保護者や専門機関、地域との連携を深め、長期欠席への対応や特別支援教育の推進に努める

- 定例委員会（不登校対策、生徒指導、いじめ対策・企画、特支等）の時間を確保し、情報共有しながら、具体的な方策を考え、学校全体で取り組む提案をする。
- 長期欠席や不登校傾向の生徒については、主担の仕事も各学年の担当と分担しながら取り組みを継続していく。特別支援学級や支援の必要な生徒については、保護者の協力を求め、ルールを明確に示して指導する。
- 生徒一人一人をしっかりと見ながら実態把握と不登校傾向の早期発見に努め、SCやSSWと連携し、子ども支援センター、LD等専門員、特別支援学校地域担当、児童相談所など、様々な関係機関の協力を求めながら、本人の背景にあるものを踏まえて本校の現状で実現可能な策を講じるようにする。
- 保護者の悩みも傾聴しながら、協力関係を築くようにする。また、ケースに応じて専門機関につなぐ。
- 本人、保護者に、過去の事例を示しながら進路目標を持つよう促す。
- 業務改善を進め、生徒に向き合う時間と生徒について話し合える時間の余裕を確保する。
- 引き継ぎを丁寧に行う。新年度、全く新しい教員が担当することがあることを念頭に文章化して引き継ぐ。